

道徳教育推進教師のあり方と開発実践

～岐阜県羽島郡の実践を中心に～

Development and practice of moral education facilitator

大藏 純子*・柳 沼良太**

OKURA Junko and YAGINUMA Ryota

* 下羽栗小学校

**岐阜大学大学院教育学研究科

キーワード：道徳教育推進教師，道徳教育推進アンケート，道徳指導チェックシート，授業サポート，アクション・リサーチ

はじめに

2008年に改訂された学習指導要領において，校長の方針を下に全教師が協力して道徳教育を展開するために，「道徳教育推進教師」が新しい役職として位置づけられた⁽¹⁾。この道徳教育推進教師は，学校機構上の位置づけや所属する組織が学校規模や運営体制によって様々であるため，道徳教育の推進に関わる体制作りは学校間で格差がある。また，道徳教育推進教師はファシリテーターだけでなく，コーディネーター，アドバイザー，サポーターなど多様な役割を求められるが，具体的にどの課題でどのような役割を果たしたらよいか不明確になる場合もある。さらに，道徳教育推進教師は，各教師の道徳授業力を向上させるために働きかける必要があるが，各教師のキャリアや能力は様々であるため，すべての教師に応じた指導を行うことは難しい面がある。

以上のような問題意識から本稿では，道徳教育推進教師のあり方を明確にした上で，学校の教育活動全体を通して行う道徳教育を推進し，その要となる道徳授業を充実させていく方策を具体的に検討していきたい。このようなテーマに関する先行研究はまだ少ないが，その中でも永田繁雄と島恒生の編著『道徳教育推進教師の役割と実際』（2010年）は，道徳教育推進教師の具体的な役割と実践例を提示している唯一の著書として貴重である⁽²⁾。また藤本嘉江は，研究指定校として配置された道徳教育推進者がどのような役割を担い，何を実践したのかについて，「自校の体制づくり」「授業づくり」「環境づくり」の3点から検討している点で注目に値する⁽³⁾。さらに，宮地真人は道徳教育推進教師の役割が「体制整備，授業改善，連携」の3つであると捉え，それに関連づけた自校の研究成果を提示した点に意義がある⁽⁴⁾。これらの先行研究は，それぞれの学校の現状を踏まえ，目指す姿に向かって道徳教育を推進した素晴らしい実践報告である。しかし，このままでは個別の実践例を提示するに留まり，これから各学校が実践する際にそのまま適応することはできない。そこでどの学校でも，どの道徳教育推進教師でも活用できるモデルプランの土台を構想していくことが必要である。

そこで本稿では，道徳教育推進教師のあり方を研究するにあたり，岐阜県羽島郡の小中学校においてアンケート調査や実地訪問を行い，客観的かつ具体的なデータに基づいて検討する。また，筆者（大藏）自身が道徳教育推進教師として全体計画を作成しそれを実践する共に，授業サポートを行うという意味で，実践と省察に基づくアクション・リサーチを行う。

本稿の内容構成は，以下の通りである。第1節では，道徳教育推進教師の役割とその課題を明確にする。第2節では，道徳教育推進教師の役割に関するアンケートのデータを分析し考察する。第3節では，道徳授業における授業サポートの取組について具体的に検討する。以上の3点から，道徳教育推進教師のあり方を明確にした上で，学校全体で行う道徳教育推進のグランドデザインを提示すると共に，道徳教育推進教師の役割のモデルプランを構想することにしたい。

第1章 道德教育推進教師の役割と課題

道德教育推進教師の役割は、『小学校学習指導要領解説 道德編』によると、①道德教育の指導計画の作成、②道德教育の推進と充実、③道德の時間の充実、④道德用教材の整備、⑤道德教育の情報提供、⑥家庭や地域社会との連携、⑦道德教育の研修、⑧道德教育の評価の8つに分類できる⁶⁾。こうした様々な役割は大別すると、①は「道德教育の指導計画の作成」、②⑤⑥⑧は「道德教育の推進と充実」、③④⑦は「道德授業の充実」に分類できる。以下、それぞれの項目ごとに検討を加えたい。

第1項 道德教育の指導計画の作成

「道德教育の指導計画の作成」は、学校における道德教育の指針を決める重要な役割である。『小学校学習指導要領解説道德編』によると、「道德教育は、校長の方針の下、学校の教育活動全体で取り生まれ、個々の教師の責任ある実践に託されていくものである。学校が組織体として一体となって道德教育を進めるために、全教師が力を発揮できる体制を整える必要がある⁶⁾。つまり、道德教育推進教師の役割は、校長の方針を活かした道德教育の諸計画を具体化していくことである。

しかし、実際には全体計画が形式化していたり、実践時に全体計画が活かされていなかったりする傾向もある。また、個々の教師は子どもに豊かな心を育てたいという願いをもっていても、明確な目標がないままに教師任せで進むことがあり、教育効果が出にくい場合もある。年度や発達段階によって子どもの実態は違うため、学校として見通しをもった道德教育を推進していくために、毎年の計画づくりはとても重要である。

指導計画を作成する際には、道德教育推進教師の意向だけでなく、全教師の総意を活かし、各分掌の代表者を集めて話し合ったり、個人の意見や考えを広く募集したりするなどの工夫が必要である。また家庭や地域にアンケートを実施したり、学校評議員やPTAなどの組織に働きかけたりすることで、家庭や地域の意見を計画づくりに活かすこともできる。

重点目標を子どもの実態から決める際には、「〇〇が弱い」「△△ができていない」と不足や欠点に目を注ぎがちであるが、それだけでは否定的な教え込みの指導に陥ってしまう。そこで自校の子どものよさを見つけ、さらに伸ばしていこうというプラスの視点を積極的に取り入れていくことが大切である。そして重点目標が決まったら、道德授業や教科等などの指導の方針と内容や時期を示していく。ここでも全教師の総意を活かして計画の作成が進められるよう、道德教育推進教師はリードしていく必要がある。以上のように、地域や学校の実情を踏まえ全教師の考えを合わせて全体計画は構成される。

こうした全体計画を具体的に実現するためには、道德教育と道德授業を車の両輪のように連動させて実践していく必要がある。以下では、全体計画に対応した「道德教育の推進と充実」と「道德授業の充実」の二側面について検討していく。

第2項 道德教育の推進と充実

次に、「道德教育の推進と充実」は、前述した全体計画を学校の教育活動全体を通して行う役割であるが、非常に内容や範囲が広いため、ある程度まで整理・分類して取り組む必要がある。また、学級における道德教育は、担任教諭を中心とした長期的な営みであるため、道德授業を要としながら総合的に取り組むことになる。個々の教師任せの道德教育では、実践内容が断片的になり、子どもの変容について具体的に捉えて指導するのが難しいため、学校の全体計画に対応させて、全教職員が協働して取り組むことが重要になる。

青森県おいらせ町立木ノ下小学校ではこれらの課題意識をもち、2006年～2008年の3年間道德教育研究指定校として、「道德教育単元的学習」を各学年で実践した⁷⁾。道德教育を学校全体で計画的に取り組むことにより、子ども自身の道徳的価値の自覚を深め、実践化・行動化へつなげることをねらった。木ノ下小学校の「道德教育単元学習」には、以下の2点の特色がある。1つ目は、単元全体を貫くテーマを設定し、それらを達成するために、各教科や領域それぞれのねらいを明確にした単元を構

成することである。学習活動を有機的に関連付けることで、今までは断片的に考えがちだった道徳的価値を、子ども普段の学習活動と関連付けて具体的に理解できるようにした。2つ目は、各教科や領域の授業の中で、授業のねらいを達成すると共に、自分の生き方を振り返り道徳的価値に気付く場面を設定した。木ノ下小学校のように学校全体で道徳教育の推進に取り組む優れた教育実践を全国の小中学校から数多く調査する必要がある。

ただし、道徳教育の推進と充実を行う上で、各学校の課題は様々である。そこで、各学校の課題が何であるかを明確にするために、アンケート調査を行い、具体的な共通点や課題をまとめていく必要がある。このアンケート調査を通して、各学校で道徳教育の推進と充実が進まない原因が、学級経営なのか、道徳授業の指導法なのか、道徳教育推進教師のリーダーシップなのか、情報提供の不足なのか、家庭や地域社会との連携不足なのか、あるいは他に原因があるのかを見極めていかなければならない。このアンケート調査については第2節で述べることにする。

第3項 道徳授業の充実

第三に、「道徳の時間の充実」が道徳教育推進の成否を決める鍵となる。『小学校学習指導要領解説道徳編』によると、「道徳の時間」は「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成する」貴重な時間である⁽⁸⁾。しかし実際のところ、道徳授業は「心に響かない」「実効性が上がらない」「画一化している」などの課題が指摘されてきた。週に1時間の道徳授業を子どもが心待ちにする充実したものにするために、まず個々の教師自身が道徳授業の特質や楽しさを感じられるようにする必要がある。

この点において島恒生は、年度当初に道徳教育推進教師が道徳の授業を公開し、道徳授業についての基本的な考え方を研修することが大切であると述べている⁽⁹⁾。全教師が「道徳の時間」は学校の教育活動全体で行われる道徳教育の要となる貴重な時間であると理解し、道徳授業の充実を図っていくことが大切なのである。

さらに、道徳授業を充実させるためには、指導法の創意工夫も求められる。北海道網走市立白鳥台小学校では2008年～2009年に文部科学省から「道徳教育実践研究事業」の指定を受け、模擬授業による指導案検討や、教師や子どもによる授業評価を行うことで授業力を高める研究を行った⁽¹⁰⁾。白鳥台小学校を始めとする多くの道徳教育推進校は、道徳の授業研究に重点を置いて改善を図った点では参考になる。

ただし、道徳授業は道徳的価値を伝達するのではなく、子どもの道徳的実践力を養う時間であるため、教師の授業技術のみを研究するのではなく、学級経営や日常生活における指導を充実させる必要がある。したがって、道徳授業と道徳教育全体は切り離すことができず、道徳授業の学びと道徳教育における実践が相互に影響し合う中で、子どもの道徳的実践力を育成することが肝心である。つまり、「道徳教育の要としての道徳授業」と捉え授業研究をしていく必要がある。道徳教育推進校だけでなく全ての小中学校において、個々の教師が自らの道徳教育の実践力や授業力を高めていくために何が具体的に求められるかを第3節で検討することにしたい。

第2節 道徳教育推進のアンケート調査

第1項 アンケート調査の意義

第1節2項で述べたように、「道徳教育の推進と充実」について実態を明らかにするためには、道徳教育推進教師の役割に関わるアンケート調査を行うことが有効であると考えられる。そこで、筆者(大蔵)は前述した『道徳教育推進教師の役割と実際』の第2章を参照して独自にアンケートを作成した(資料1)。設問は各校の長所や短所を把握しやすいように具体的な事項が示してある。

まず、1-1などの小設問についてA「よくできている」(4点)、B「できている」(3点)、C「あまりできていない」(2点)、D「できていない」(1点)の4観点で評価し、その結果から道徳教育推進教

師の役割 8 項目の評定を出していく。これをパイロットプランとし、2012年10月に岐阜県羽島郡の小中学校（小学校 6 校，中学校 2 校）の道徳教育推進教師を対象にアンケート調査を行った。羽島郡の道徳教育の実態を掴むと共に、道徳教育推進教師が自校の道徳教育の長所や短所を明らかにし課題の改善に役立てることもねらいとした。

1 項目ごとに各校の道徳教育推進教師と評定を出しながら、「この項目の中でよく実践できているはありますか」「何か困っていることはありませんか」という問いかけも行った。そうした対話の中で各校の道徳教育推進教師は自校の成果と課題を明確に把握し、道徳実践の具体的な取組や道徳教育推進教師として抱える様々な悩みを具体的に提示した。アンケート調査で明らかになった羽島郡の道徳教育の傾向を以下に述べる。

第 2 項 8 項目に関する傾向と課題

羽島郡における道徳教育推進教師の役割 8 項目についての達成度をみると、①「道徳教育の指導計画の作成」…4 点満点中 3.5 点、②「道徳教育の推進と充実」…2.9 点、③「道徳授業の充実」…2.8 点、④「道徳用教材の整備」…2.1 点、⑤「道徳教育の情報提供」…3.3 点、⑥「家庭や地域社会との連携」…2.7 点、⑦「道徳教育の研修」…2.6 点、⑧「道徳教育の評価」…2.6 点となった。

達成度が高かった①②⑤の項目からは、各学校において指導計画が整備され、道徳教育の情報は全教師に提供され、指導計画に基づいて道徳教育が推進されていると言える。しかしこれらは従前の道徳主任が行ってきた役割と重なるため、道徳教育推進教師に求められているファシリテーターとしての役割というよりは、チーフとしての役割に留まっている。また、④⑦⑧の道徳授業に関連する項目の実践が弱いことも明らかになった。この結果からは道徳用教材の整備や活用の推進が進まず、道徳授業を充実させることができていないことが分かる。

これらの課題を解決するためには、以下のことが考えられる。まず、④「道徳用教材の整備」については、道徳授業を支える道徳用教材の整備や活用を全教師で行っていくことが必要となる。次に、⑦「道徳教育の研修」については、道徳教育推進教師が中心となり道徳授業の協力的指導体制を作っていくことが求められる。第三に、⑧「道徳教育の評価」については、短期評価だけでなく中長期の評価を行い道徳の授業に活かしていくことを全教員に指示したり、教師・保護者・地域の人など多くの目で子どもを多角的に評価するシステムを作ったりすることが求められる。

第 3 項 小設問における傾向と課題

次にそれぞれの小設問ごとの達成度を考察する。全 25 項目の小設問の中で達成度が高かったものは、1-1「諸計画の整備」…4 点満点中 3.9 点、6-3「道徳教育月間」…3.5 点、1-2「子どもの実態に応じた諸計画」…3.4 点、4-1「道徳用教材の整理・活用」…3.4 点、⑤5-2「会議等による情報提供」…3.4 点である。また、達成度が低かったものは、4-3「道徳用教材の開発」…1.3 点、6-2「地域に働きかける道徳教育推進教師」…1.5 点、4-2「道徳用教材の収集」…1.8 点であった。他に比べ大きく実施が遅れている結果である。

以上のことから、①「道徳教育の指導計画の作成」に関わる項目についてはよく実践されていることが分かる。また、6-3「道徳教育月間」や 5-2「会議等による情報提供」がよく実践されていることから、道徳推進の校内体制が整えられていると言える。達成度の低い 4-2「道徳用教材の収集」や 4-3「道徳用教材の開発」は、専門的な知識や時間を要するため十分にできていない実態がある。さらに、6-2「地域に働きかける」点も、課題があることが明らかになった。

こうした全 25 項目の中には、道徳教育推進教師が積極的に働きかけることで比較的早期に解決できる項目もあれば、全教師で役割を分担する必要があるため時間を要するものもある。全校の協力体制を活かして道徳教育を活性化する後者の項目では、道徳教育推進教師のファシリテーターあるいはコーディネーターとしての力量が問われるところである。このアンケートから学校ごとの成果と課題が明確になったが、その中で特徴的な 3 校について以下に考察する。

第4項 特徴的な3校の傾向と課題

まず、A小学校は40年以上に渡り道徳教育研究に取り組んでいる優れた実践校である。A小学校では教務主任が道徳教育推進教師を兼任し、研究推進委員長が道徳の授業研究を中心になって進めるため、2人のリーダーによって道徳教育が強力に進められている。8項目の中で④「道徳用教材の整備」と⑧「道徳教育の評価」は3.3点であるが、その他の項目はすべて4点満点であった。A小学校の道徳教育が充実している理由としては、「指導計画の作成や道徳授業力の向上に全校が一丸となって取り組んでいること」、「研究推進委員長や学年主任が若手教員へ支援を行っていること」、「研究推進委員会が中心となり学校ぐるみで道徳教育を推進していること」が挙げられる。

課題としては、「授業技術のみではよい道徳授業はできないため、学級経営を充実させること」、「教材開発に取り組むこと」が挙げられた。道徳推進校ならでの優れた実態が数多く見られたが、それでも学級経営や教材開発という点では課題が残っていることも明らかになった。

次に、B中学校は2011年～2012年の2年間、岐阜県教育委員会の指定を受け道徳教育の研究を進めている学校である。道徳教育推進教師は研究推進委員長を兼任しているため、学校の中心となって道徳教育を推進していく校内体制が整えられている。アンケート調査では、①「道徳教育の指導計画の作成」が4点、②「道徳教育の推進と充実」が3.6点、③「道徳の時間の充実」が3.7点と全般的に高く評価されていた。また、④「道徳用教材の整備」が2点、⑥「家庭や地域との連携」が2.3点と低く評価されていた。

B中学校の道徳教育の傾向は、「全校体制で道徳の研究を進めている」、「学年会で道徳の事前研を行い授業力の向上を重点的に行っている」ことである。課題としては、「学級経営が十分に行われていない」、「道徳の事前研を行っても学級の基盤が弱いと授業が成功しない」ということであった。このアンケート調査を踏まえることで、B中学校では道徳授業を充実させるために、道徳教育を中心にした日頃の学級経営を今後さらに重視することについて再認識した。

最後に、C小学校は国語と算数を校内研究で取り組む学校である。アンケート調査から道徳教育があまり進んでいないという実態が明らかになった。具体的には、①「道徳教育の指導計画の作成」が3点そして③「道徳の時間の充実」が3点と高めではあるが、④「道徳用教材の整備」が1.6点そして⑦「道徳教育の研修」が2.3点と低めであり、全教師が協力して道徳教育を進める指導体制が弱いことが明らかになった。

この結果を踏まえて道徳教育推進教師は、全体計画の共通理解を行い学校全体の目標を明確化し道徳教育をスタートさせることが肝心であることを認識した。C小学校の道徳教育推進教師は、毎月の職員会議で道徳教育に関する情報提供をしてきたが、全校の実践がなかなか高まらないという課題を感じていた。

以上の3つの学校の事例に共通して言えることは、学校の教育活動全体で道徳教育を力強く推進していくためには、全教師による全体計画の共通理解を欠くことはできないということである。A小学校とB中学校に共通する利点としては、校内のリーダーである教務主任や研究推進委員長が道徳教育推進教師を兼任しているため、全教師が協力して道徳教育を推進している点を指摘できる。C小学校の道徳教育推進教師は、学習指導部の校務分掌の1つとして位置付けられているため、より積極的にファシリテーターとしての役割を果たすことが求められる。

一方、道徳教育の優れた実践校であっても学級経営力や授業力が課題として残っている。良いと思われる指導法の押し付けだけでは、道徳授業を充実させることはできない。これに関する打開策は、A小学校の道徳教育推進教師によれば、「別葉を作成することで、道徳授業と学校の教育活動全体で行う道徳教育との関連を明確にし、全教師がこの指導計画に沿って実践をしていくこと」であった。たしかに道徳授業を他の教育活動との関わりを意識して行い、総合単元的に道徳教育を実践していくことは、教師の学級経営力や授業力を高めると共に子どもの実効性を高めることに繋がると考えられ

る。さらに3校とも③「道德の時間の充実」における、教師の授業力の向上については、まだ課題があるとしている。道德授業の充実のためには、道德教育推進教師による細やかな指導や配慮が必要である。どのような支援が有効かについて次節で考察する。

第3節 道德授業の授業サポート

第1項 授業サポートの意義と特徴

道德教育推進教師は、全教師の道德授業をサポートし、アドバイスし、コーチすることも求められる。しかし、学校には初任者から中堅教師やベテラン教師まで経験や力量の違う様々な教師が存在しており、それぞれに異なる課題意識をもっている。それぞれの教師に合わせた適切な授業サポートを行うことで、授業力を向上させていくことができると考えられる。

授業サポートのメリットはまず、教師のキャリア形成や自己課題に応じたアドバイスをを行うことで、授業力や意欲を高めることができることである。次に、授業サポートの期間を設定し授業者に道德授業の特質や楽しさを経験させることができることである。授業サポートをする前提として、一人一人の教師の自己課題を把握することが必要であるため、筆者（大蔵）は「道德指導チェックシート」を独自に開発した（資料2）。この道德指導チェックシートは、筆者が小学校教諭として15年間にわたって取り組んだ道德実践の中で、授業力向上に繋がると思われる項目についてまとめたものである。

このチェックシートは、①「事前の教材研究」、②「道德の時間における教師の役割」、③「道德の時間における板書」、④「事後指導」、⑤「教育活動全体で行う道德教育」の5つの視点から成り、授業者が自己評価するものとする。このチェックシートを基に、道德教育推進教師は授業者の自己課題を的確に掴み支援に活かすことができると共に、授業者自身も長期的な見通しをもって授業力向上に自主的に取り組むことができる。

チェックシートを自校の教師に実施した結果、授業サポートの内容は大別して若手教師・中堅教師・ベテラン教師の3つに分類できることが分かった。第一に、若手教師は基本的な理論と技法を習得することを望むため、導入や展開の工夫・発問の仕方・役割演技の方法などについてサポートする。そして児童や教師自身が道德授業の特質や楽しさを感じられるようにしていく。第二に、中堅教師は、基本的な道德授業ができてより充実した授業を展開したいと望むため、構造的な板書・深めの発問・展開後段の工夫などについてサポートする。そして心に響く深まりのある時間を実践し、児童が心待ちにする道德授業を目指す。第三に、ベテラン教師や高学年担当の教師に対して、多様な授業展開・魅力的な教材開発などについてサポートする。そして画一化していると言われる授業展開を脱却し、子どもが主体的に自己の生き方を考える展開を工夫することで実効性に繋げていく。以下に筆者（大蔵）が2012年10月から12月にかけて羽島郡下羽栗小学校で行った事例研究について考察する。

第2項 道德の経験が浅い教師へのサポート

初任の男性A教諭（2年生担任）、新採2年目の女性B教諭（5年生担任）、教員6年目の女性C教諭（1年生担任）の3名それぞれに授業サポートを各2回実施した。道德指導チェックシートと面談によって決定した自己課題は、A教諭が「展開時における発問の仕方」、B教諭が「中心発問の設定の仕方と板書のあり方」、C教諭が「役割演技の工夫と交流への活かし方」となった。それぞれのキャリアや担当学年によって自己課題は様々であることが分かる。ここで道德教育推進教師は、道德授業の進め方について相談に乗るサポーターあるいはアドバイザーとしての役割を果たすことが分かる。次に、これらの授業サポートの中で紙幅の都合上、C教諭の事例研究についてのみ取り上げて報告したい。

C教諭への授業サポート

C教諭は6年目の教師で、今年度は1年生を担当している。1年生は生活指導と学業指導を一から行わなければならない、教師には指導力が求められる。C教諭は学級の子ども達と信頼関係はできていたが、叱らないで学習に集中させることができず、教科経営において苦勞していた。特に役割演技や

動作化をした時に、子どもが劇化の楽しさに浸り、その後の話し合いに繋がらないという悩みがあった。そこで1回目の授業サポートでは、筆者（大蔵）が動作化を取り入れた授業を実践し、C教諭には「教師の発問の投げかけ方と子どもの発言の取り上げ方、またどのように話し合いに繋げていくか」について詳しく観察するよう助言した。C教諭の省察シートには、「何のために変身（動作化）するのかを子どもに理解させて学習活動を仕組むことが大切と分かった」、「その時の子どものつぶやきを教師が拾って広めることで、子どもたちは意欲的に主人公の心情を話していた」、「そうすることで教師もその後の話し合いを深める組み立てを考えることができる」と書かれていた。

下羽栗小学校で実施した道徳指導チェックシートの結果からも、「基本的な理論と技法を習得したい」と感じている教師は、先述の3分類の中で一番多かった。また年齢だけでなく道徳教育のキャリアをチェックし、道徳の経験が浅い教師に対しても同様のサポートを行い個々の教師自身に道徳授業の特質や楽しさを感じられるようにしていく必要がある。また、「基本的な理論と技法の習得」であっても、上述した3名の教師のように自己課題はそれぞれ違うため、それに見合ったアプローチを用意することが求められる。

C教諭は授業サポートによって、役割演技や動作化の手法を身につけることができた。役割演技を話し合いに活かす手法を身につけたC教諭は、自分の指導に自信をもち、子ども達と共に楽しい道徳授業を実践している。C教諭は、自分自身の実践と筆者（大蔵）の実践の違いはどこかについて詳しく観察することで、自分で方法を見つけることができた。このように道徳教育推進教師は、若手に授業技術を押し付けるのではなく、道徳授業の意義と方法を丁寧に教え、実際に模範を示し、若手に実践を推奨することによって授業力を高めることができると考えられる。

第3項 中堅教師への授業サポート

D教諭は40代後半の女性教諭で、理科の授業研究を進める授業力と学級経営力が共に非常に高い教師である。しかし理科とは授業展開が異なる道徳授業に対し、戸惑いと苦手意識をもっていた。そこで道徳指導チェックシートと面談を行い、D教諭の自己課題を「活発な話し合いを生むための発問の仕方」および「話し合いを深めるための板書の工夫」とした。

1回目の授業サポートでは、「活発な話し合いを生むための発問の仕方」を実践的に把握してもらうために、D教諭には筆者（大蔵）が行う発問とそれに対することへの反応や発言を詳しく記録してもらった。特に「子どもに考えさせたいことをT1（大蔵）はどのような言い方で投げかけているか」、「話し合いを深めるためにT1はどんな声かけをして子どもの発言を繋いでいるか」について注意深く観察してもらった。

D教諭の省察シートには、「子どもの発言を受け止め、端的な言葉で板書するためには事前に予想される発言について分析しておくしかない」、「深めの発問は様々あるが、子どもに一番考えさせたいことをはっきりさせて発問を構成していくことが大切だ」と書かれていた。2回目の授業サポートでは、子どもの発言を端的にかつ構造的に板書にまとめる練習をするためT2として授業に参加してもらった。T1が授業を進め、D教諭は子どもの発言を聴き分けながら板書をした。D教諭の省察シートには、「構造的な板書を手掛かりに、子どもが話し合いを深めていく姿を目の前で見ることで板書計画の大切さを再認識した」、「板書計画を立てる時に子どもの反応を予想して意見を分類しておけば、深めの発問を投げかけて子どもの思考を揺さぶることができる」、「本時T1は、深めの発問から子どもが自己の生き方を振り返ることができるよう意図的に深めの発問を行った。それによって話し合いが活発になったので、発問はよく吟味したい」と記されていた。

以上の中堅教師への授業サポートを通して、次の成果が明らかになった。1つ目は、道徳指導チェックシートを用いて今までの実践を省察することで、自分の実践の長所と短所を明らかにできたことである。2つ目は、「チェックシート→課題の明確化→授業実践→振り返り」というPDCAサイクルで授業実践をしたが、これは今後授業者一人でも実践可能ということである。

この実践で道徳教育推進教師（大藏）はD教諭との関わりの中で、こちらから課題を提示したり指導法を押し付けたりするのではなく、カウンセリング・マインドでD教諭の悩みを傾聴し、コーチングの手法を用いてD教諭自身が自己目標を決定できるように心掛けた。D教諭は、自己課題とする発問と板書について、事前に板書計画を立てることで価値理解・資料理解・児童理解ができ授業のねらいが明らかになると共に、授業展開の見通しをもつことができることを理解することができた。また、板書計画を立てることで、深めの発問をあらかじめ想定できることや、発言をキーワードで構造的に板書をすることができることを、T1（大藏）の授業実践を間近で観察し理解した。さらに、構造的な板書については子ども思考の補助になり、より話し合いが深まっていくことをT2として体験した。

D教諭にとって「①授業は流れるが発言が少ない→②授業が盛り上がらない→③発言を整理して板書できない→④話し合いが深まらない→⑤道徳的価値を押し付けている（→①に戻り繰り返す）」という道徳授業のマイナス・スパイラルを、授業サポートによってプラスのスパイラルに変えることができた。D教諭は道徳に対する苦手意識を少し解消し、意欲的に事前の教材研究をして道徳授業に臨んでいる。

第4項 ベテラン教師への授業サポート

E教諭は40代後半の女性教師で、専門の音楽だけでなく道徳教育を熱心に実践している教師である。低学年の指導経験が多く、動作化や役割演技を取り入れて主人公の心情を深く探り、自分を見つめていく道徳授業は得意である。道徳指導チェックシートを通して、子どもたちの実効性をより授業実践をしたいという新たな願いが生まれたため、E教諭の自己課題を「多様なアプローチ」とした。そして、主人公の心情を追っていく従来の展開とは異なる「問題解決型の道徳授業」の実践に挑戦することにした。しかし、E教諭は「問題解決型の道徳授業」の展開を熟知していないため、1回目の授業サポートは筆者（大藏）の提案授業という形で実践した。1年生の道徳授業では心情を追求しながら学習した「2わのことり」を2年生で再び取り上げ、今度は問題解決型の道徳授業として実践した。尚、授業構想は柳沼良太の『問題解決型の道徳授業』（2006年）の実践例を参照した⁽¹⁾。

この授業提案により、ベテラン教師や参観した教師の道徳授業に対する見方や考え方を広げることができた。子どもたちが「自分だったらどのように行動するか」を真剣に考えて活発に話し合ったり、自分の生活をじっくり振り返ってワークシートを記入したりする様子から、画一化していると言われる授業展開から脱却し、実効性を高めていく方法を工夫する余地があることを提示することができた。今後も授業サポートを進め、さらに指導方法を創意工夫して道徳授業の充実を図っていきたい。

課題としては、問題解決型の道徳授業では、子ども達が予想外の発言や本音を偶発的に語りだすこともあるため、授業者は発言を瞬時に分析・判断し問題解決のための支援や助言を行う必要がある。また、多様な考えや本音を引き出すためには教師が常に受容的で公平公正な立場に立ち、問題解決を温かくサポートする等の学級経営の力量も必要となる。これらのことを念頭において授業実践に臨むことが大切である。

おわりに

本稿では、道徳教育推進教師のあり方を明確にした上で、道徳教育推進に関するアンケート調査を行い、具体的な課題とその対応を検討した。道徳教育推進教師の役割は(1)「道徳教育の指導計画」、(2)「道徳教育の推進と充実」、(3)「道徳の時間の充実」の三つに大別できるが、羽島郡の小中学校の道徳教育推進教師を対象に行ったアンケート調査からは、道徳教育推進教師が(1)「道徳教育の指導計画」の共通理解を行い、学校全体の目標を明確化するファシリテーターとしての役割を第一に果たすべきであることが明らかになった。また、学校全体でより力強く道徳教育を推進するための指導体制を学校の実態に応じて構築していく必要がある。羽島郡の小中学校の事例からも、道徳教育推進教師が運営機構上のどこに位置付くかによって、道徳教育の達成度に違いが見られるため、校長を中心

とした相互の連携や協力が大切になる。

次に、道徳教育推進教師が授業サポートをすることで全体のレベルアップを図ることができることが明らかになった。適切な授業サポートをするためには、一人一人の教師の発想や個性を活かし創意工夫して道徳の授業づくりを進める必要がある。その際には、本稿で提示した「道徳指導チェックシート」を用いて授業者の自己課題を明らかにすることが有効である。また、道徳教育推進教師は、支援する教師の悩みや願いを傾聴し共感するためにカウンセリング・マインドをもつことも必要であることが明らかになった。それにより授業者は、日頃の道徳教育に関する悩みや疑問を数多く提示し、それにより授業者の課題解決に必要な支援内容を丁寧に示すことができるからである。また、道徳教育推進教師はコーチングの手法を用いて、授業者一人が抱える課題を共に考え、適切な目標設定や評価、具体的に丁寧な支援を行うことも大切であることが認識された。上から押し付ける指導ではなく、学校内の道徳教育の同心円の中心に位置し、全教師や子どもたちに道徳教育のよう影響を与え続けていくことが、道徳教育推進教師には重要になる。このような継続的な取り組みにより、道徳教育実践に対して消極的また批判的な意識をもつ教師に対しても、授業サポートを行って改善を促していくことが可能になる。

最後に今後の課題を二つ挙げる。一つ目は、授業研究のあり方を再検討することである。従来の授業研究では、「この時、授業者はどう指導するべきであったか」という視点で振り返り、ベテラン教師が若手教師に指導をしてしまうことが多い。しかし、道徳教育推進教師は一般の教師と共に学び考える姿勢をもち、「本時の学びが深まった場面で、教師と子どもや子ども同士がどのように関わっていたか」を振り返る反省的実践を意識的に行うことが求められる。このように授業者の持ち味を大切にして省察をした時、授業者は道徳授業の特質や楽しさを味わい、意欲的に授業力向上の取り組みを始めることができる。道徳教育推進教師はこのような協力的な人的環境を整え、学校全体の道徳教育の推進力を強めていくサポーターとしての役割も求められる。二つ目は、1人の授業者に対し数回の授業サポートをするだけでは授業力向上に限界があるということである。数回の授業サポートでも授業者の苦手意識を減少させることには一定の成果はあるが、それ以後も授業者側の継続的な努力と道徳教育推進教師側の定期的で的確な支援の継続が必要となる。今後、管理職による指導体制の充実や、学年会・学年部会などの既存の組織を有効に活用しながら、全教師が互いに学び合える体制をコーディネートすることも道徳教育推進教師の重要な役割になると考えられる。こうした課題とその対応については別稿に記すことにしたい。

(註)

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008年, 93頁参照。
- (2) 永田繁雄・島恒生 編著『道徳教育推進教師の役割と実際～心を育てる学校教育の活性化のために～』, 教育出版, 2010年。
- (3) 藤本嘉江「道徳教育研究推進をしていくための役割と働きかけの実際～道徳教育推進者の立場から～」, 『道徳教育方法研究』第12号, 2006年。
- (4) 宮地真人「協働意識を高めることによる道徳教育推進体制の改善・充実～道徳教育推進教師がかかわる道徳教育マネジメントの推進～」, 2010年。以下のサイトから引用。
<http://www2.gsn.ed.jp/houkoku/2010c/10c04/10c04h.pdf.pdf>
- (5) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』, 2008年, 64頁。
- (6) 同上書。
- (7) 永田繁雄・島恒生 編著, 前掲書, 38～45頁。
- (8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』2008年, 29頁。
- (9) 永田繁雄・島恒生 編著, 前掲書, 21頁。
- (10) 同上書, 30～37頁。
- (11) 柳沼良太『問題解決型の道徳授業～プラグマティック・アプローチ』, 明治図書, 2006年, 39～41頁。

資料1 道徳教育推進教師の役割に関するアンケート

番号	質問	A	B	C	D
①	1 道徳教育の指導計画 校長の方針を活かした道徳教育の諸計画を作成している。				
1-1	全体計画・年間計画・学級における指導計画（別葉を含む）等の諸計画が整えられている。				
1-2	道徳教育の諸計画は、心を育てる見通しをもち、学校の児童生徒の実態や発達の段階に応じたものになっている。				
1-3	道徳教育の諸計画は、みんなの意見を結集して作成されている。				
②	2 道徳教育 全体計画を柱に、それぞれの教育活動の特質を活かした道徳教育を推進している。				
2-1	教職員は、全体計画・年間計画・学級における指導計画（別葉を含む）等の諸計画を、掲示したり手元に置いたりして実践時に活用している。				
2-2	教職員は、授業やそれぞれの教育活動（朝の会や帰りの会、給食、掃除、休み時間、クラブ活動）の特質に応じた道徳指導を進めている。				
2-3	道徳教育推進教師は、会議や研究会で道徳教育推進の立場から意見を述べるなど、組織で道徳教育が推進できるようにしている。				
③	3 道徳の時間 道徳の時間の充実と協力的指導などの体制づくりに努めている。				
3-1	道徳の時間の特質と楽しさを、教職員が理解できるように率先して働きかけている。				
3-2	道徳の時間の進め方について教職員の相談に乗っている。				
3-3	道徳の時間が話題になる職員室の雰囲気をつくっている。				
3-4	校長や教頭などによる指導や、チーム・ティーチングなどを積極的に呼びかけ、計画や調整をしている。				
④	3 道徳の時間 道徳用教材の整備や充実、活用の促進を行っている。				
4-1	いつでも、誰でも、自由に取り出して使えるよう、道徳用教材が整理・保管され、教職員に活用されている。				
4-2	新しい道徳用教材を収集するために、研究会や書籍、雑誌、インターネット、新聞、テレビ、身近な出来事などを活用している。				
4-3	道徳用教材の開発（自作資料を含む）に取り組んでいる。				

番号	質問	A	B	C	D
⑤	2 道徳教育 学校の道徳的な環境の整備と、情報提供を行っている。				
5-1	学校の教室や廊下，校内の掲示板を活用し，道徳的な環境整備を全校で積極的に行っている。				
5-2	職員会議での提案や道徳通信などを通して，道徳教育に関する情報を広めている。				
5-3	道徳の研究会や研修会に参加した教職員が，校内で研修内容を報告し，情報を共有できるようにしている。				
⑥	2 道徳教育 道徳教育推進教師として，家庭や地域に働きかけている。				
6-1	通信やホームページなどで，道徳の話題を取り上げ，家庭や地域に発信している。				
6-2	道徳教育推進教師として，PTAや地域の懇談会等へ参加するなど，道徳の先生として地域の人に働きかけている。				
6-3	道徳教育推進月間・週間などを設け，全ての学級が道徳の授業公開を行っている。				
⑦	3 道徳の時間 教師の授業力の向上を目指して研修を行っている。				
7-1	道徳教育や道徳の時間の特質，授業づくりについて理解する職員研修を行っている。				
7-2	学校ぐるみで児童生徒の心に響く授業づくりに取り組んでいる。				
7-3	道徳研修の充実のために，率先して周囲の学校と情報交換をしている。				
⑧	2 道徳教育 子どもの道徳性の実態を把握し，指導や授業改善に活かすようにしている。				
8-1	教職員は，アンケートや記述評価による，子どもの道徳性の継続的な評価を行っている。				
8-2	学級担任だけでなく，学校の教職員，保護者，地域の人たちに子どものプラス面を積極的に評価してもらうようにしている。				
8-3	年度末だけでなく，年間を通じて指導計画を評価・改善している。				

※永田繁雄・島恒生編著『道徳教育推進教師の役割と実際』第2章(16～28頁)を参照し、大藏純子が作成した。

資料2 道徳指導チェックシート

番号	質問	A	B	C	D
①	事前の教材研究				
1-1	年間指導計画にそって「道徳の時間」の授業実践をしている。				
1-2	年間指導計画の文章資料が児童生徒の実態に即していない時には、その価値に関わる別の文章資料を準備するなどの配慮をしている。				
1-3	本時の道徳的価値に関わる児童生徒の実態を日常観察や日記などで掴み、授業時に活用できるようにしている。				
1-4	事前に本時の文章資料を読み、児童生徒の実態を考慮して、発問を考えたり、発問を選択したりしている。				
1-5	発問に対して、児童生徒がどんな発言をするか予測するなどの準備をしている。				
1-6	板書計画を作成したり、板書内容をイメージしたりして、授業の方向性を明確にしている。				
1-7	児童生徒の思考の助けになるように、場面絵やペープサートを準備し活用している。				
1-8	児童生徒が自己見つけをしたことを記入できるよう、発達段階に応じたワークシートを準備している。				
②	道徳の時間における教師の役割				
2-1	導入では、児童生徒の道徳的実践を紹介し本時の道徳的価値への方向付けを行ったり、現在の価値観を素直に表出させたりしている。また、資料によっては資料導入を行う等、導入の工夫をしている。				
2-2	事前に吟味した中心発問や基本発問を投げかけた後、児童生徒から多様な思いや考えを引き出すようにしている。				
2-3	どの児童生徒の発言も、その子なりの根拠があると考え、適切に価値づけている。				
2-4	児童生徒が発言した多様な考えを、板書に分類・整理し、話し合いを焦点化したり、深めたりしている。				
2-5	中心発問の道徳的価値の自覚を促すために、「深めの発問」を設定した授業を行っている。				
2-6	役割演技や動作化を有効に活用している。				
2-7	教師が本時の価値を教え込むのではなく、児童生徒による話し合いから、本時の道徳的価値が掴めるようにしている。				
2-8	展開後段や終末では、本時の道徳的価値を「自己の生き方」に繋げて行くことができるような発問の工夫をしている。				
2-9	児童生徒が自分の心を見つめる時間を確保し、振り返りができずに困っている児童生徒には適切な指導援助を行っている。				
2-10	児童生徒がワークシートに記述した考えを交流したり、教師が意図的に紹介したりして、道徳的実践に繋ぐ終末にしている。				
2-11	道徳の授業を特別活動や各教科と関連付けて道徳的実践力を育成する工夫をしている。				
2-12	家庭や地域社会と連携した道徳授業にしている。				
2-13	多様な展開を創意工夫している。				

番号	質問	A	B	C	D
③	道徳の時間の板書				
3-1	日時や資料名を明記し、児童生徒に見やすい丁寧な文字で板書をしている。				
3-2	場面絵や写真などの掲示資料を適切に位置づけて、児童生徒の思考を促すよう工夫している。				
3-3	基本発問や中心発問の交流での児童生徒の多様な考えを、ネームプレートや色チョーク等を使用し、分類・整理して板書している。				
3-4	資料を基にして話し合った本時の道徳的価値を板書している。				
3-5	児童生徒が自己見つけをする時、本時の話し合いの流れが分かる板書になっている。				
3-6	授業終了後の板書は、学びの筋道(導入・展開・終末)が分かる構造的なものになっている。				
④	事後指導				
4-1	児童生徒が自己を見つめて記入したワークシートに目を通して、返却している。				
4-2	朝の会や帰りの会の先生の話で、ワークシートの内容を意図的に取り上げて広めたり、児童生徒の道徳的実践の姿を価値付けたりしている。				
4-3	本時の道徳で学んだことを学級通信等に掲載し、家庭へ広めている。				
4-4	学級児童の様子を学年や校内の先生に伝え、学校ぐるみで児童生徒の心の成長を温かく見守っていく環境を作っている。				
⑤	教育活動全体で行う道徳教育				
5-1	日常の様々な機会を捉えて教育的指導を行っている。				
5-2	教育的指導を行う時には、目に見える部分の行為や行動だけでなく、目に見えない部分である心情についても語らせて、児童生徒の気持ちを理解したうえで指導をしている。				
5-3	人として間違っている言動に対しては、根拠を明確にしながら、毅然とした態度で指導を行っている。				
5-4	児童生徒が一生懸命活動を行ったり(責任)、仲間を親身になって助けたり(友情)するなどの道徳的実践を行う姿を的確に価値づけている。				
5-5	上記の道徳的実践を学級の児童生徒に広める時には、行為だけでなくその行為を支えた心情に値打ちがあることを伝える等、心の教育を実践している。				
5-6	道徳の時間や休み時間、給食などの時間には、児童生徒が自分の素直な思いを話せる雰囲気や教師との信頼関係を作っている。				
5-7	朝の会や帰りの会の先生の話では、新聞・ニュース・詩・作文・日記等を基に、適切なテーマを取り上げ、児童生徒の心に響く話をしている。				
5-8	日頃から様々な授業や場面で、先生や仲間の話を反応しながらじっくり聞いたり、恥ずかしがらず堂々と表現したり、それを真剣に見たり聞いたりできる学習姿勢を育成している。				

※大藏純子が自らの道徳実践を基に作成。

